学 術 調 査 報 告 書

2008 年　3 月　7 日

（フリガナ）	（イシダ　サトコ）	入学年度	平成 18 年度
申請者名	石田　聖子	学年	2 年

研究題目	20 世紀イタリア文化表象におけるユーモアに関する考察
主任指導教員	和田忠彦

（1）学術調査の目的

調査者の研究は、イタリアの作家アルド・パラッツェスキ（Aldo Palazzeschi）の小説『ペレラの法典』（*Il codice di Perelà*, 1911）および未来派宣言文「反苦悩」（*Il controdolore*, 1914）を主な考察の対象とするものである。笑いを主戦略とするこれらテクストは、同時代および後代の笑いの表象に多大な影響を与えたことから、並行して、当時のイタリアの笑いの状況を明らかにすることも目指す。

そうした調査者の研究は、国内では先行研究が少ない領域であるため、国内図書館が所蔵する関連図書に極めて乏しく、イタリアにての資料収集が不可欠であり、具体的には以下に挙げる文献、資料の閲覧・収集をもって標記の研究に活用することを今回の調査の目的とした。

調査者が必要とする資料は、①パラッツェスキ関連資料、②笑い関連資料に大別される。

①に関しては、まず、その創作過程を読み解くために、現存する「反苦悩」の手稿の閲覧を、また、研究の主な対象とするテクストの背景にある思考の把握に努めるべく、笑いを強く意識していたと目される時期（1905～1915 年）の作家の寄稿記事、書簡の参照が肝要となる。

②については、パラッツェスキと同時期に笑いに着目し、「笑いの古典」叢書刊行をもって、後のイタリアにおける笑い文学普及に貢献した編集者アンジェロ・フォルトゥナート・フォルミッジニ（Angelo Fortunato Formiggini）、および、同じく未来派と関わり、言語上のみならず身体的にも笑いを表象し、笑いの文学に範を提供したヴァラエティー・ショー俳優エットレ・ペトロリーニ(Ettore Petrolini)による著作および関連資料を必要とする。

とりわけ、フォルミッジニ、ペトロリーニの活動を視野に入れた考察は、調査者の研究に独創性を与えるものであるため、その収集は有意義であると考えられる。

(2) 調査実施地および期間

調査は、2008 年 2 月 10 日から 2008 年 2 月 23 日までの約二週間にわたり実施された。より詳細には、到着後一週間（2008 年 2 月 10 日～2008 年 2 月 16 日）を在フィレンツェ研究所、図書館にて、後の一週間（2008 年 2 月 17 日～2008 年 2 月 23 日）を在トリノ図書館にての調査に充てた。

(3) 学術調査の具体的な実施内容（詳細に記入すること）

まず、フィレンツェでは、①アルド・パラッツェスキ研究所（Centro di Studi Aldo Palazzeschi : Piazza Savonarola 1）、 ②フィレンツェ大学附属文学部図書館（Università degli Studi di Firenze, Biblioteca Umanistica : Piazza Brunelleschi 3）、③フィレンツェ国立中央図書館（Biblioteca Nazionale Centrale di Firenze : Via Sant'Ambrogio 2）において資料収集を行った。上記在フィレンツェ機関では、主にパラッツェスキ関連資料を中心に収集した。

フィレンツェ大学文学部イタリア文化研究科内に設置される①は、作家が生前蔵した書籍、書簡の他、パラッツェスキ関連資料（書籍、論文、記事、視聴覚資料）を保管するものであり、②内の希少文献部門は、パラッツェスキ作品の初版本を中心に、①施設にて所蔵が困難な文献・資料を収める。

調査の具体的な方法としては、複写が禁じられている手稿、書簡に関しては閲覧を、複写が可能な新聞・雑誌記事については複写を行った。なお、いずれの機関とも利用者制限を設けており、調査者は研究計画書等の提出を経て管理者より利用許可を得た。また、①、②にての資料調査に先立っては、20 世紀イタリア文学デジタル資料館（Archivio digitale del '900 letterario italiano）内パラッツェスキ資料館（Archivio Palazzeschi : http://www.ad900.it/detail.asp?idn=2901&IDSezione=19）にて、その所蔵する文献目録および資料請求記号が公開されているため、事前に必要な情報を収集し、現地では、迅速な作業を行った。なお、当サイトへのアクセス許可もまた上記同様の審査を経て、事前に得る必要があった。また、パラッツェスキが受信した書簡の一部については、当サイト上

で閲覧することが可能であったため、予定していた調査の一部をこの時点で済ませることができた。

パラッツェスキ研究の唯一の拠点である当機関の訪問は、パラッツェスキ関連資料を網羅的に収集・保管することから、調査者が標記の題目のもと研究を進めるにあたって必要な資料の収集を短期間に遂行するに有益であった。①にはまた、様々な観点からパラッツェスキ研究を行う研究者が多数在籍していることから、情報交換等交流を通じ、申請者の研究に新たな視点を加えることができた点においても、その訪問は有意義であった。

また、①、②はいずれも開館時間が午前中のみに制限されるため（②は曜日によっては午後まで閲覧が可能)、午後を③施設での資料収集に充てた。

在フィレンツェ機関①、②は、利用規定により一週間を超える利用が不可能であるため、到着後一週間をフィレンツェでの調査に充てた後、同機関が閉館する週末を利用して鉄道にてトリノへ移動し、その後の日程をトリノでの資料調査実施に充てた。

トリノでは、笑い関連資料の収集を中心に調査を実施した。調査実施機関は、①トリノ大学現代比較文学・言語学科附属図書館（Università degli Studi di Torino, Biblioteca del Dipartimento di Scienze del Linguaggio e Letterature Moderne e Comparate : Via Giulia di Barolo 3/A）、②国立映画博物館附属図書館（Biblioteca internazionale di Cinema e Fotografia “Mario Gromo” : Via San Pietro in Vincoli 28)、③市内図書館（トリノ国立図書館 Biblioteca Nazionale Universitaria di Torino : Piazza Carlo Alberto 3、トリノ市立中央図書館 Biblioteca Civica Centrale : Via della Cittadella 5）である。

まず、①では、アンジェロ・フォルトゥナート・フォルミッジニ著『笑いの哲学』の閲覧、複写を行った。

映画・演劇関連資料の豊富さにおいてイタリア有数の②は、他図書館では入手し難いペトロリーニ関連資料を多く所蔵する。資料の館外持ち出しが固く禁じられている当館では、閲覧、および館内複写機を利用しての複写をもって資料の収集にあたった。

③では、フォルミッジニ関連資料の収集を行った。国立図書館では複写機の利用が停止されていたことから閲覧を主とした調査を行い、市立図書館では閲覧および館内に設置される複写機を利用して必要箇所の複写を行った。

(4) 学術調査の結果およびそれに基づく考察など

当初、現地での調査・収集を予定していたパラッツェスキの受信した書簡に関しては、上述の通り、既に出発前に閲覧する機会を得たため、調査実施地では、既に絶版となり、日本では入手困難な書籍、パラッツェスキ著初版本の収集を優先して実施した。一方で、雑誌等に掲載された論文等、最新の研究成果の収集を行う余裕に欠けた点においては反省点が残る。

今回の学術調査を経て得た資料は具体的には以下の通りである。

● *Lacerba*「ラチェルバ」紙掲載記事

（1913 年から 1915 年まで刊行された当誌にパラッツェスキは数多くの記事を寄稿した。調査者の研究において特に重要度が高いと判断される記事のみ以下に抜粋。）

1914 年 1 月 15 日第 2 号――*Il controdolore*「反苦悩」:「反苦悩」初出。

1914 年 12 月 24 日第 24 号――*Neutrale*「中立宣言」: 第一次大戦へのイタリア参戦に対するパラッツェスキの態度をタイトルの通りに明確に表明した。大戦勃発を個人的な重大事として捉えたパラッツェスキにおいては、これを契機にその作風にも変化が訪れる。パラッツェスキ研究においては、その全活動を大まかに三期に分けて考察するのが通例となっているが、ちょうどこの時期より第二期が始まる。調査者が今回の研究で考察の対象とする時期の終わりをしるす時期でもある。

1915 年 2 月 14 日第 7 号――*Futurismo e Marinettismo*「未来主義とマリネッティ主義」: 未来派の理念とマリネッティ個人の理念との乖離を非難、次いで、パラッツェスキの未来派脱退の意志を明確にしたジョヴァンニ・パピーニ、アルデンゴ・ソッフィチとの連名記事。以降、勇んで戦場へ駆けていった未来派のかつての盟友と異なり、パラッツェスキの笑いはしばし影をひそめ、戦争に対する批判記事を多くものするようになる。

● その他新聞、雑誌掲載記事

――インタビュー：1960 年代以降、注目を浴び始めたパラッツェスキは多くのインタビューを受けた。今回は、なかでも若年期および未来派を回想するもの、および作家の笑い認識が明らかになると思われるものを中心に収集した。

Giuseppe Grieco, *Palazzeschi ha scritto le favole del nostro tempo*（「現代の寓話作家パラッツェスキ」）（*Grazia*, 10 aprile 1960）

Grazia Livi, *La mia ricetta della felicità*（「幸せのレシピ」）（*Epoca*, 17 marzo 1963）

Alfredo Todisco, *Sono sempre stato sulla luna*（「ずっと月に…」）（*Corriere della Sera*, 8 dicembre 1963）

Anna Grazia D'Oria, *Incontro con Palazzeschi*（「パラッツェスキ・インタビュー」）（*La Tribuna del Salento*, 16 giugno 1967）

Corrado Stajano, *Palazzeschi:≪Ora più che mai mi affascina il soprannaturale≫*（「パラッツェスキ「かつてないほど超自然に惹かれるんだ」」）（*Corriere della Sera*, 10 settembre 1967）

Giuseppe Grieco, *La mia vita, i miei amici*（「人生、友」）（*Gente*, 7 maggio 1969）

Claudio Angelini, *Del mondo di oggi mi piace la smania. Incontro con Palazzeschi*（「最近の何かを渇望する空気が気に入っている：パラッツェスキ・インタビュー」）（*La Fiera letteraria*, 11 aprile 1971）

Enzo Siciliano, *Palazzeschi si diverte*（「パラッツェスキの愉しみ」）（*La Stampa*, 24 ottobre 1973）

――パラッツェスキ寄稿記事：詩と前衛について語るもの。とりわけ、サングイネーティとの対談はパラッツェスキ独特の前衛意識を浮き彫りにしており興味深い。

Aldo Palazzeschi, *Inchiesta mondiale sulla poesia*（「詩について、アンケート」）（*La Gazzetta del Popolo*, 28 ottobre 1931）

Aldo Palazzeschi, *Palazzeschi allo specchio*（「鏡の中のパラッツェスキ」）（*Omnibus*, 29 maggio 1937）

Aldo Palazzeschi, Edoardo Sanguineti, *Filo diretto Palazzeschi-Sanguineti: Sull'avanguardia*（「パラッツェスキからサングイネーティへ：前衛について」）（*Corriere della Sera*, 22 ottobre 1967）

――パラッツェスキ批評：1905～1915 年に書かれたもののうちで調査者の研究に寄与すると考えられるもの、および笑いにテーマを絞ったものを中心に収集した。

Luigi Rasi, *La Scuola di Recitazione di Firenze. Rocordi del Direttore*（「フィレンツェ演劇学校長の思い出」）（*La Lettura*, 8 agosto 1905）

Anonimo, *Luigi Rasi*（「ルイージ・ラージ」）, *Il Signor Pubblico*, 17 febbraio 1906

Francesco Cangiullo, *Ad Aldo Palazzeschi*（「拝啓アルド・パラッツェスキ様」）（*L'Allegria*, 2 giugno 1910）

Pietro Pancrazi, *Umorismo di Palazzeschi*（「パラッツェスキのユーモア」）（*Corriere della Sera*, 7 marzo 1937）

Angelo Mele, *Palazzeschi tra il buffo e l'ironia*（「パラッツェスキ、滑稽とイロニーの間で」）（*Nostro Tempo*, giugno-luglio 1964）

Ferdinando Camon, *Palazzeschi e l'ironia*（「パラッツェスキとイロニー」）（*Il Gazzettino*, 12 gennaio 1965）

Angelo Guglielmi, *Il comico in Palazzeschi*（「パラッツェスキにおけるコミック」）（*Calabria d'oggi*, 10 marzo 1968）

Arnaldo Bocelli, *≪Follia≫ e saggezza di Aldo Palazzeschi*（「パラッツェスキの「狂気」と知と」）（*La Stampa*, 10 maggio 1968）

Giuseppe Amoroso, *L'ironia di Palazzeschi*（「パラッツェスキのイロニー」）（*Gazzetta del Sud*, 23 dicembre 1969）

Mario Stefani, *Palazzeschi tra amore ed ironia*（「パラッツェスキ、愛とイロニーの狭間で」）（*La Gazzetta delle Arti*, 6 giugno 1971）

Q. M., *L'umorismo fantastico di Perelà apprezzato dal pubblico di Udine*（「ウーディネの観客が称賛、ペレラの幻想的ユーモア」）（*Messaggero Veneto*, 29 febbraio 1972）

● Aldo Palazzeschi, *Il Codice di Perelà: romanzo futurista*（『ペレラの法典：未来派小説』）, Edizioni Futuriste di Poesia, Milano 1911

——調査者が標記の研究を進めるにあたり主要な考察対象となる小説『ペレラの法典』の初版本。手持ちのテクストとの異同を中心に、主として装丁と体裁を確認した。

● Aldo Palazzeschi, *Il controdolore*（「反苦悩」）、手稿

——アルド・パラッツェスキ研究所が所蔵する手稿は、調査者が期待していた 1914 年の *Il controdolore* の手稿ではなく、後年発表された *L'antidolore* の手稿のみであった。*L'antidolore* の由緒については謎が多い。*L'antidolore* とのタイトルは、当テクストを未来派宣言としてマリネッティに最初に提示した際にパラッツェスキが選んだものであったことから、マリネッティによる手直しが施される以前の *Il controdolore* の原案であるとも考えられる。事実、参照した手稿は、その傷みの少なさから 1950 年代にものされたものであると考えるのが妥当であるように思われたが、末尾には「1913 年、フィレンツェにて」との記載も確認できた。1913 年に書かれた当初の内容に忠実に

1950 年代に新たに作成されたものか。

- Aldo Palazzeschi, *Scherzi di gioventù* （『若気の悪戯』）, Ricciardi, Milano-Napoli 1956

  ——*L'antidolore* と改題された *Il controdolore*「反苦悩」をはじめ、「反苦悩」と同時期に似た思想を背景に「ラチェルバ」誌に寄せて書かれた短いテクスト全 4 篇（*Lazzi, frizzi, schizzi, girigogli e ghiribizzi, Varietà, Equilibrio, L'antidolore*）を収録する。そのうちで、未来派の宣言として発表されたのは *L'antidolore* のみだが、その他のいずれも、宣言の補足として捉え得る性質を備えるものであるため、「反苦悩」考察の際に参照項として機能しうると考えられる。また、パラッツェスキ本人による序文中の、「反苦悩」が未来派の宣言文として採用されるにあたりマリネッティとの間で交わされたやり取りを回想する箇所は、「反苦悩」の来歴を知るうえで貴重な証言である。

- Aldo Palazzeschi, *Romanzi straordinari 1907-1914* （『驚異小説集 1907～1914 年』）, Vallecchi, Firenze 1943

  ——本書収録時に『11 月のアレゴリー』(*Allegoria di Novembre*)と改題されたパラッツェスキの小説家としてのデビュー作である『省察』(*: riflessi*)、『ペレラの法典』、『ピラミッド』(*Piramide*) を収録する。いずれも笑いとは無縁ではないこれら小説三篇を「驚異小説」との表題のもとに纏め、1943 年に、改めて世に問うた意味は、当時の笑いをめぐる状況に照らしたうえで再考に値すると考える。閲覧し、目次と体裁等を確認した。序文等はなし。

- Roberto Guicciardini, *Perelà, un uomo di fumo* （『ペレラ、煙の男』）台本、1971

  ——1971 年、ロベルト・グイッチャルディーニにより舞台化された『ペレラの法典』の台本。グイッチャルディーニ本人によるメモを多く残す。舞台という制約上、長編小説に含まれる場面のいくつかは省略されるが、台詞のほとんどは小説版原文をそのままに利用したものであった。小説『ペレラの法典』の演劇性の高さを充分に確認できる。

- *I poeti futuristi* （『未来派の詩人たち』）, Edizioni Futuriste di Poesia, Milano 1912

  ——マリネッティによる「未来派文学技術宣言 manifesto tecnico della letteratura futurista」を序文として収める、未来派が活発な活動を展開していた時期に編まれた未来派詩のアンソロジー。収録は詩人名のアルファベット順。パラッツェスキの収録

作品を確認。扉に掲載された未来派の宣伝文にては、マリネッティを筆頭とする未来派詩人を代表する三人の詩人のうちにパラッツェスキの名が含まれており、パラッツェスキがマリネッティの厚い信頼を得ていた事実を再確認した。

- F.T. Marinetti-Aldo Palazzeschi, *Carteggio* （『書簡集』）, Mondadori, Milano 1978
  ――未来派の中心人物フィリッポ・トンマーゾ・マリネッティとパラッツェスキの間で交わされた書簡の集成。マリネッティに見初められ、1909 年からの 5 年間を未来派の一員として活動したパラッツェスキは、未来派の理念を良く象徴するとマリネッティに認められながらも、しかし、未来派としては一風変わった行動様式を保ち続けた。おおよそ正反対ともいえる性質をもつふたりは、伝統に対峙するというただ一点のみにて交差したといえる。その相容れなさ故にこそ、未来派という枠を超え、長きにわたり互いを尊重し合う関係にあったふたりの姿は、ふたりの間で交わされた書簡をたどることで、より良く確認できる。また、パラッツェスキが笑いをもっとも強く意識していた時期がその未来派加入時期と重なることからもこの書簡集は調査者の研究において重要度が高い。
- *Palazzeschi oggi: Atti del convegno Firenze 6-8 novembre 1976*（『パラッツェスキは今日：シンポジウム録 1976 年 11 月 6－8 日於フィレンツェ』）, a cura di Lanfranco Caretti, il Saggiatore, Milano 1978
  ――新前衛派により発見、称揚されたことが本格的なパラッツェスキ研究の契機となった。参加陣の豪華さから、またかつてなく体系的であったことから、パラッツェスキ研究史において現在までも伝説的として語り継がれる当シンポジウムの記録は、その当時の熱狂をそのままに伝えるものとしてだけでなく、そこで為された発言の多くがいまだに有効な問いを発し続けていることからも示唆に富む。とりわけレナート・バリッリの、ズヴェーヴォやピランデッロという、似た問題意識を共有していた同時代の他のイタリアの作家との対比のうちにパラッツェスキの「反苦悩」を捉える試みは他に類例がない。
- Giovanni Boccaccio, *Il Decamerone Giornata 1*（『デカメロン：一日目』）*(Classici del ridere n.1)*, A.F. Formiggini, Genova 1913
  ――『笑いの哲学』を著したフォルミッジニが積年の思いを込め創刊した叢書「笑いの古典」の第一巻。フォルミッジニによる創刊の辞を期待して閲覧したが、そうした

類のものは一切なし。収録テクストは、原文通りでなく、理解の便を図る程度に翻訳が施されたものであることから、フォルミッジニが当叢書創刊に際し、笑いを最重要視したことが知れる。木版画があしらわれた美しい装丁が印象的であった。

- Angelo Fortunato Formiggini, *Filosofia del ridere*（『笑いの哲学』）, Cooperativa libreria Universitaria Editrice Bologna, Bologna 1989

  ——1906 年にフォルミッジニがボローニャ大学に提出した学位請求論文。笑いのメカニズムの検討に発し、笑いに付随する感情、論理、倫理観、次いで、動物、子どもや原始人における笑い、性格別の笑いの分析を経て、笑いの一変形としてのユーモア、笑いと社会との関連を論じたもの。調査者は、なかでも、笑いのなかでもユーモアを独立させて論じた点、および社会との関連分析に注目した。わずか 2 ページに終始するユーモア分析は充分な深みには達していないが、ユーモアをその一形態として笑い一般から独立させたうえで、その用語の定義付けの必要性、ならびにその分析を心理学的観点から行う必要が指摘される。また、社会との関連での笑い分析においては、終章ながら、結論を急がず、これからの研究の充実の必要性を訴える。いずれも笑い学研究の新しい地平を予感させる。

- Angelo Fortunato Formiggini, *Trenta anni dopo: Storia della mia casa editrice*（『30 年後に：我が出版社を語る』）, Ricciardo Franco Levi, Modena 1977

  ——イタリアで施行された人種法に抗議して 1938 年に自ら命を絶った編集者フォルミッジニがその死を決意した後に後世に遺すべく自ら筆を執った書。オンラインカタログには未だ登録がされておらず、トリノ市立中央図書館のカード目録にて発見し、その場で閲覧、複写した。言葉の力をひたすらに信じた 30 年にわたる自らの出版人としての半生を語るなかでは、叢書「笑いの古典」に寄せる思いについても多く紙幅が割かれる。その頁数の多さはまた、他の叢書と異なり「笑いの古典」叢書は、読者よりも誰よりもまず自分のために創刊したとするフォルミッジニの言を裏付けるように思われる。

- Ettore Petrolini, *Al mio pubblico: scritti postumi*（『観客に寄せて：遺作集』）, Ceschina, Milano 1937

  ——あらゆる機会に執筆も好んでしたペトロリーニ自身の手による回想、断片、新案メモ等を収めるもの。

- Mario Dessy, *Petrolini* （『ペトロリーニ』）, Modernissima, Milano 1921

  ――ペトロリーニがヴァラエティー・ショーにて活躍していた当時、その名も‘Gli uomoni del giorno’「時のひと」シリーズの第 43 号として発行された冊子。「ペトロリーニ現象」「イタリア社会におけるペトロリーニの重要性と意味」等の章題のもとにペトロリーニが主に当時の社会状況との関連で論じられる。30 ページ足らずの小冊子であるが、ペトロリーニが同時代に与えたインパクトを知るに貴重な証言である。

- Giorgio Bertero, *Petrolini, l'uomo che deride* （『ペトロリーニ、嘲笑する男』）, Bompiani, Milano 1974

  ――マリネッティは未来派をユーモアの面にて極めるとしてペトロリーニを称揚した。本書はペトロリーニと未来派の関係を未来派宣言、書簡、イタリア国内外紙に掲載された批評を引用しながら明らかにしてゆく。その人気が圧倒的であったことから、時とともにますます「伝説的」「天才的」とばかり形容されてきたペトロリーニをめぐる辛辣な意見を再検討した章が独創的であり、調査者の関心を引いた。

- Arturo Lancellotti, *I signori del riso, Scarpetta, Ferravilla, Galli, Benini, Zago, Fregoli, Musco, Viviani, Petrolini* （『笑いの御仁たち―スカルペッタ、フェッラヴィッラ、ガッリ、ベニーニ、ザーゴ、フレーゴリ、ムスコ、ヴィヴィアーニ、ペトロリーニ』）, P. Maglione, Roma 1931

  ――ペトロリーニをはじめ、20 世紀前半にヴァラエティー・ショーにて活躍した俳優を個別に論じる書。ペトロリーニだけでなく当時のヴァラエティー・ショー周辺の笑いを包括的に知るに良き指南の書である。

(5) 調査地・文書館建物などの写真データ（二枚程度）貼り付け

（フィレンツェ国立中央図書館外観）

（国立映画博物館附属図書館正面）